

【基礎編】第11回 集団療育へのABA理論の応用①:プログラム立案

◆ 研修資料(受講者配布用) ◆

1. はじめに:個別支援から集団支援へ

これまで私たちは、主に子ども一人ひとりと向き合う個別支援の技術を学んできました。しかし、子どもたちが将来生活していくのは、家庭、園、学校、地域といった「集団」の場です。

集団療育の目的は、単に複数の子どもを同時に見ることではありません。集団だからこそできる学び、例えば、他者とのやりとり、ルールの理解、模倣学習、順番待ちなどを、意図的・計画的に提供する場です。

しかし、集団の中には、発達段階も、得意なことも、苦手なことも、支援の目標も異なる子どもたちが同時に存在します。この複雑な状況を成功に導く鍵は、支援者の「勘」や「当日の頑張り」に頼るのではなく、ABAの原理に基づいた周到な「プログラム立案(プランニング)」にあります。効果的な集団療育は、活動が始まる前の準備で9割が決まります。

2. 集団療育の二つの視点:「集団のねらい」と「個別のねらい」

優れた集団療育プログラムは、常に「集団全体」と「個々の子ども」という二つの視点を持っています。一つの活動の中に、この二つのねらいを明確に設定することが、計画の第一歩です。

- ① 集団のねらい(活動全体の目標)
 - その活動を通して、集団全体に達成してほしい共通の目標。
 - 例:「ルールのある遊びを通して、順番を待つことの楽しさを経験する」「他者と協力して一つのものを作り上げる達成感を味わう」
- ② 個別のねらい(一人ひとりの目標)
 - その活動の中で、一人ひとりの子どもが取り組む、個別支援計画に基づいた具体的な目標。
 - 同じ活動に参加していても、AさんとBさんでは、達成すべき目標が異なります。

【計画立案の具体例:『フルーツバスケット』を行う場合】

	集団のねらい	個別のねらい(例)
計画	・自分の言われたフルーツを聞き取り、ルールに従って動くことができる。 ・空いている席を探し、他者との接触を避けながら座る。	Aくん:個別支援計画の目標「2語文での要求」 →鬼になった時に、支援者のプロンプトを受けながら「〇〇さん、どうぞ」と2語文で言う。
		Bさん:個別支援計画の目標「着席を5分間維持する」 →自分の番が来るまで、椅子か

		ら離れずに座って参加できればOK。
		Cちゃん:個別支援計画の目標「他児への肯定的な関心」 →席を移動する時に、他の子の動きを見て、真似て動くことができればOK。

3. 成功のための事前準備:集団への「先行事象(A)」の工夫

問題行動が起きにくい、学びの多い集団活動にするためには、活動が始まる前の「A(先行事象)」、つまり環境設定が極めて重要です。

① 活動の構造化(見通しを持たせる)

- 何をするか?:その日の活動の流れを、絵や写真カードで提示する。(例:朝の会 → 運動あそび → おやつ)
- どうやるか?:活動の手順を、写真やイラストで具体的に示す。(例:手洗いの手順、工作の作り方)
- なぜ重要?:先の見通しが立つことで、子どもは不安なく、落ち着いて活動に参加できます。

② 物理的な環境設定(集中できる環境を作る)

- 座席の配置:
 - 支援が必要な子の隣には、支援者が座る。
 - 注意が散りやすい子は、壁側や刺激の少ない場所に座る。
 - トラブルになりやすい子同士は、少し離して座る。
- 教材・物品の準備:
 - 活動に必要なものは、事前に全て準備し、すぐに取り出せるようにしておく。
 - NBDIの応用として、あえて教材を支援者が管理し、子どもが「ちょうだい」と要求する機会を作ることも有効。

③ ルールの明確化(行動の基準を示す)

- ルールは3つ程度に絞り、具体的に、肯定的な言葉で伝える。
 - NG:「走らない」→ OK:「お部屋の中は歩きましょう」
- ルールも絵や写真で視覚的に提示すると、より効果的。

4. 集団を動かす「強化」の仕組み

集団の中でも、強化の原理は同じです。個々の望ましい行動を、支援者がすかさず褒める(強化する)ことが基本となります。それに加え、集団ならではの強化法も有効です。

- グループ強化(トークンエコノミーの応用)
 - 仕組み:チーム全体で、共通の目標達成を目指す仕組み。個人の頑張りが、チーム全体の報酬に繋がります。

- 【具体例：お星さまポスター】
 1. 活動の前に、ご褒美となる活動（例：みんなでシャボン玉）の絵をポスターに貼っておく。
 2. 子どもたちがルールを守れたり、素晴らしい行動（友達に「かして」が言えた等）をしたる度に、ポスターにキラキラの星シールを1枚貼る。
 3. 活動の終わりに、星が目標の数（例：5個）に達したら、ご褒美の活動を全員で行う。
 - なぜ有効？：
 - 「みんなで頑張ろう！」という一体感が生まれる。
 - 他の友達の望ましい行動が、自分たちの利益に繋がるため、子ども同士で「すごいね！」と褒め合うなど、ポジティブな相互作用が生まれやすい。
-

◆ 講師用原稿 ◆

(スライド1:タイトル)

「皆さん、こんにちは。研修第11回を始めます。今日から数回にわたり、これまで学んできたABAの理論と実践を、より複雑でダイナミックな『集団療育』の場でどう活かしていくか、というテーマに入ります。個別支援でできるようになったことを、集団の中で、生活の中で、本当に『使える』スキルにしていくための、重要なステップです。今回はその第一歩として、成功の9割を決めるとも言われる『プログラム立案』に焦点を当てます。」

(スライド2:二つの視点) 25分

「皆さんが集団活動を計画する時、絶対に忘れてはならないのが、この『集団のねらい』と『個別のねらい』という二つの視点です。」

(スライドのフルーツバスケットの例を指しながら)

この活動の集団としてのねらいは、『ルールを理解して動く』ことかもしれません。しかし、参加している子どもたち一人ひとりに、私たちは違うレンズを当てて見る必要があります。」

「Bさんにとっては、ゲームに勝つことよりも、まずは5分間、その場に座って参加し続けること自体が、個別支援計画に基づいた立派な目標です。もしBさんが5分間座れたなら、たとえゲームのルールを理解していなくても、私たちは『すごい！目標達成だね！』と最大限に褒める(強化する)必要があります。」

このように、一つの活動の中に、複数の『成功の基準』を意図的に設定しておくこと。これが、誰一人取り残さない集団療育計画の基本です。」

(スライド3:先行事象の工夫) 30分

「次に、その活動を成功させるための『事前準備』、つまり先行事象のコントロールです。問題行動というのは、起きてから対応するよりも、そもそも起きないように環境を整えておく方が、何倍も効果的で、子どもにとっても幸せです。」

(スライド4:構造化・環境設定・ルール)

「そのための3つの柱が、『構造化』『環境設定』『ルール』です。」

(実際の写真などを見せながら)

例えば、このような絵カードのスケジュール。これは、言葉の理解が難しい子にとって、先の見通しという『安心』を与えてくれる、魔法のカードです。

座席の配置一つをとっても、Aくんの隣には、彼が困った時にすぐにサポートできる支援者が座る、Bさんの視界には刺激物が入りにくいように壁側にする、など、全てに意図があります。私たちは、まるで舞台監督のように、子どもたちが最高のパフォーマンスを発揮できる舞台を整えるのです。」

(スライド5:グループ強化) 25分

「環境を整えたら、次に行動の『結果(C)』、つまり強化の計画を立てます。集団の中で特に有効なのが、この『グループ強化』です。」

「(お星さまポスターの例を説明しながら)

この仕組みの面白い点は、子どもたちの意識が、『自分のため』だけでなく『みんなのため』に向かうことです。Aくんが頑張るとシールをゲットすると、周りの子ども『やったー！』と喜びます。Aくんは、支援者からだけでなく、仲間からも称賛されるという、非常に自然で強力な社会的強化を受けることに

なります。

これは、ただおやつをあげるよりも、ずっと高度な社会性を育むことに繋がります。皆さんの事業所でも、どんなグループ強化ができそうか、ぜひ考えてみてください。」

(スライド6:グループワーク) 20分

「では、皆さんに集団療育プログラムの骨子を立案してもらいます。」

「(ワーク)活動内容:『新聞紙を使ったビリビリ遊び』

この活動について、以下の4点をグループで計画してみてください。

- ① 集団のねらい(例:感覚遊びを楽しむ、など)
- ② 個別のねらい(発語を促したい子、着席を目標にする子、など自由に設定)
- ③ 先行事象の工夫(どんなルールや環境設定をしますか?)
- ④ 強化の計画(どんなグループ強化ができそうですか?)

(10分程度)」

「(発表後)...素晴らしいプランばかりですね！同じ新聞紙遊びでも、個別のねらいを『ちぎって、と声を出す』にしたり、『ゴミ袋を指差す』にしたりと、様々な展開が考えられますね。また、グループ強化として『みんなで新聞紙のお風呂を作る』というアイデアも楽しそうです。このように、計画段階でどれだけ具体的にイメージできるかが、活動の質を決めます。」

(スライド7:まとめ) 10分

「本日は、集団療育のプログラム立案について学びました。キーポイントを振り返ります。

- 集団と個別の、二つのねらいを明確に持つこと。
- 構造化、環境設定、ルールといった先行事象の工夫で、成功しやすい環境をデザインすること。
- グループ強化などを活用し、ポジティブな相互作用が生まれる仕組みを計画すること。

私たちの仕事は、行き当たりばったりの対応ではなく、科学的根拠に基づいた緻密な計画の連続です。」

「次回は、この計画を元に、集団の中で特に重要な『ソーシャルスキル』をどう教えていくか、SST(ソーシャルスキルトレーニング)について学んでいきます。

何か質問はありますか？(質疑応答)

...それでは、本日の研修はこれで終了です。お疲れ様でした。」